

# 清末における中国新式窯業の展開について

馮 赫 陽

## 1. はじめに

アヘン戦争（1840-1842年）、そしてアロー戦争（1856-1860年）の敗北の後、清王朝体制がはげしく揺さ振られ、清朝政府は欧米の軍事的・経済的な圧力に直面しなければならないことになった。このような衝撃に対し、清朝政府は「自強」のために欧米の近代文明を中国に導入し、特に機械・工業・軍事工業を発展させる新政策すなわち「洋務」というものを推進するようになったのである<sup>(1)</sup>。洋務の実践は洋式軍事技術の導入をもってはじめられたことから、必然的に兵器製造などに関する諸企業・諸産業を呼び起すものであった。そのため中国では近代的な工場・企業が漸次に創始されたのである。そのような影響を受けて伝統的な手工業の一つである窯業もまた洋式機器製造の様式に変化していくのである。

この洋務運動時期に設立された企業に関する研究は、輪船招商局・鋌務局・機器製造局等の重工業の分野が主として注目され、1950年代に中国史学会が編纂した資料集『洋務運動』や夏東元氏の研究に代表される成果が上梓された。これらは富強を目指した軍事、兵器産業の分野の研究の進展に大いに寄与し、巫碧秀氏の「洋務運動研究の現状と課題：日清戦争以前の官営軍事工業の評価を中心に」、田育誠氏の「洋務運動時期における中国近代技術産業の導入と発展の研究」、鈴木智夫氏の「洋務運動期における上海生絲貿易の展開」などの研究<sup>(2)</sup>が続々と発表され、関係研究はなお進展している。ところが窯業にはほとんど関心が持たれることがなく、洋務運動時期における手工業としての新式窯業の展開に関する研究については、その成果がほとんど無い状況であると言える。

そこで本稿は、清末に中国新式窯業の発展に寄与した江西景德鎮磁業有限公司と湖南醴陵磁業公司を中心に、その成立経緯・経営状況などを述べると共に、近代中国における新式窯業の展開について述べてみたい。

## 2. 清末中国窯業の概況

『清朝続文献通考』巻386、実業9には、江西・江蘇・広東・福建・直隸・山東・河南・湖南・山西・浙江・安徽・陝西・甘肅・四川・奉天・吉林十六省の窯業分布を記している<sup>(3)</sup>。その中で江西・江蘇・広東・福建諸省の窯業は最も重要である。すなわち饒窯・宜興窯・広窯・建窯である<sup>(4)</sup>。次の表1は、上述の四つの窯を主として解説する。

表1 清末において重要な窯の状況一覧<sup>(5)</sup>

窯名	位置	窯数	産品種類
饒窯	江西省浮梁県西南景德鎮	百餘座	精製磁器
宜興窯	江蘇省宜興県東南部の蜀山と鼎山	不明	陶器飲茶道具
広窯	広東省南海県佛山鎮附近の石湾	八十座	粗製釉下着畫
建窯	福建省徳化県後井・黄洞・南嶺	五、六十座	白磁

### ①陶土

饒窯における陶土は種類が多く、産地が異なるため、性質も相違する。その産地と性質そして価格については、明治32年(1899)5月付の藤江永孝の報告<sup>(6)</sup>に、

素地ニ用ル原料ハ、南康府星子縣ニ産スル較々粘カアリ火力強キ粘土(壹塊ノ目形凡ソ四斤ニシテ、其價壹圓ニ付凡ソ七十塊ニ當ル、即チ一貫目ニ付二錢二釐ナリ)及ビ浮梁縣東濤街産ノ耐火力強キカオリン土(骨或ハ明砂ト稱ス、其價壹圓ニ付五百塊ニ相當シ、四塊ヲ以テ壹斤トス、即チ壹貫目ニ付五錢ナリ)ニ加フルニ浮梁縣西郷産ノ火度甚ダ弱キ粘土(其價壹圓ニ付百塊ニ相當シ、一塊ノ目方凡ソ四斤トス、即チ壹貫目ノ價壹錢五釐ナリ)ヲ以テズ、亦是ニ加フルニ浮梁縣濤器塢産ノ壽項土(其價壹圓ニ付五百塊ニ相當シ、壹塊ノ目方凡ソ壹斤トス、即チ壹貫目ノ價壹錢二釐也)ナル火力弱キ者ヲ以テスルモアリ。

と記されている。陶土として浮梁県東濤街産のカオリン土の品質が最も優良であったため当然価格も高かった。次に南康府星子・浮梁県西郷・浮梁県濤器塢等の地方で産する陶土があったことがわかる。

宜興窯では飲茶の道具を主として製造していたが、さまざまな粘土を用いていた。『清朝統文献通考』<sup>(7)</sup>には、

原料来自附近之銅官山等處、有紅泥、紫泥、嫩泥、夾泥、天青泥(緑泥)、豆沙泥等、紅泥最可貴、紫泥今採取殆盡。

とあり、江蘇省の宜興県の近くに銅官山があり、各種類の陶泥を産し、その中には紅泥が最も価格の高いものであり、紫泥は清末にはすでに採掘し尽くされていたことがわかる。

同書<sup>(8)</sup>には、広東省の広窯について、

原料白泥初為本地所産、後改用東莞花県産、質地較優。

とあり、原料として最初当地に産する白泥を用いたが、後に広東省内の東莞や花県に産する粘土の品質が優れていたため、その地の陶土を用いたことがわかる。

福建省の徳化県の建窯が用いた陶土に関する記録は『清朝統文献通考』には書かれていないが、北村弥一郎の「清国窯業調査報告書」<sup>(9)</sup>によって補足すれば、次の表2のようにまとめることが出来る。

表2 徳化窯が用いた陶土の状況

産地	品質	価格
観音岐 (徳化ヲ距ル一里内外)	石英斑岩ニシテ極メテ微少ナル雲母ノ黒色小斑点ヲ有ス、之レヲ本邦磁器火度ニ焼煨セバ、能ク焼締リテ光澤アル、美白色ヲ呈ス	不明
大坵頭 (徳化ヲ距ル三里餘)	此處ニ産ス物上等坯土ノ調製ニ使用セラル、モノトシ	百斤約四十五錢
牛屎嶺 (徳化ヲ距ル半里餘)	石英斑岩ノ分解セジモノニシテ、淡黄褐色ヲ帯ビ、爪ニテ傷ケ得ベシ、此本邦磁器火度ニ焼煨セバ、焼締リテ鼠色ヲ帯ビ、吸水性ナシ	不明
楓洋 (徳化ヲ距ル約一里)	産ス坯土ニ使用セラル	不明
大際 (楓洋ノ近旁)	産ス坯土ニ使用セラル	不明
洞上 (徳化ヲ一里許)	牛屎嶺ト同ジク石英斑岩ノ分解セシモノナリト雖モ、分解ノ度居一層深く指頭ニテ粉碎シ得ベシ、而シテ所々ニ雲母ニ起因セル、赤褐色ノ斑点ヲ有セリ、此物本邦磁器火度ニ焼煨スルモ、吸水性ヲ有シ、赤褐色ノ斑点ハ熔融シテ黒点ニ変ズ	不明

北村の報告から徳化窯では徳化県の近くに産する陶土が使用されたことがわかる。

## ②燃料

19世紀末、中国にはまだ石炭が広く使用されず、陶磁器製造時には大量の木材を使用していた。『清朝統文献通考』<sup>(10)</sup>には、

〔景德鎮〕所用薪炭取給於餘干・南康・東流・建徳等縣，近者二三十里，遠者三四百里。と記される。おそらく景德鎮附近の浮梁県産の木材が使い尽くされていたことから、景德鎮窯は附近の餘干県などの諸県から薪炭を買っていたことがわかる。薪炭の産地は近いところでも景德鎮から二、三十里（清里），遠いところでは三、四百里ほど離れた距離にあった。景德鎮で用いられた薪料の種類や価格について藤江の報告<sup>(11)</sup>にその一部を見ることができる。

薪材ハ主トシテ饒州府附近ヨリ来ルモノ、如シ、何レモ松薪ニシテ、其長サ六寸五分内外、其價壹万五千斤斗ニ付、景德鎮着四拾圓トス（此内饒府ヨリノ運賃五圓ヲ含有ス）、之レヲ本邦ノ量目ニ換算スルニ凡ソ壹圓ニ付六拾貫内外ニ當リ、其品質強チ劣等ナラズ、又粗陶器ヲ焼成スルニハ雜木ノ小枝柴草等ヲ混用ス、其價同量ニ對シ、松薪ヨリ凡ソ一倍半乃至一倍七廉價ニ當ルト云フ。

とある。景德鎮の精製磁器の製造時に松の木を使用し、粗製磁器の製造の時には劣る薪や柴を使っていた。景德鎮の周辺における松の木の減少に伴い、遠くの地方へ薪材を求めなければならなかった。明治34年（1907）に在清国海外実業練習生として景德鎮に行った石黒秀久の報告<sup>(12)</sup>には、

年々歳々伐採スルノミナリ、現今ハ江西省内ヲ殆ンド盡シ、遠ク福建・安徽ノ二省ヨリ供給

スト聞ク、其相場ハ一元（我一圓ト殆ンド同額）ニ我參拾五貫内外ナリ、一年ノ消失高ハ八  
十萬兩弱ナリト言フ、斯ノ如ク需要供給ノ法行ハル。余ノ一見シタル薪材ハ實ニ細木ナリ  
キ、火力ノ點ニ於テモ大木ヲ使用スルヲ可ナルコトハ明々タレトモ餘程困窮シツ、アルカヲ  
知ル、然レドモ現今未ダ石炭ハ使用セズ、全々松ノ細木ノミナリ。

と記される。景德鎮窯では江西省以外の省から松の細木を買っていたことがわかる。木材は遠く  
の地方から運送されてきた上に、また松の木を必ず使用したため、その値段が高かったようであ  
る。薪材の原価が高くなったことで、陶磁器の値段は必然的に高騰した。それは景德鎮産の陶磁  
器製品が、競合する外国製品よりも不利となったところであった。

宜興窯では燃料は、

芒茅等ノ雜草ニシテ（松葉及ビ雜木等ヲ燃セバ器物ニ黙々タル膨脹鮫膚ノ如ク出来ル恐レワ  
リトテ、一切使用セズ）、凡ソ五萬斤を要シ、百斤の價百三十文ト云ヘバ、凡ソ我ガ七拾余  
圓、即チ産出高の一割弱ニ當ルナリ<sup>(13)</sup>。

とあり、芒茅等の雜草を使用していた。

広東の石湾窯も松の木を用いていたことがわかる<sup>(14)</sup>。

徳化窯については、北村弥一郎の「清国窯業調査報告書」<sup>(15)</sup>によれば、

燃料ハ全部松薪ヲ用ヒ、其消費額ハ大窯ニ於テ約六百擔トシ、時ニ或ハ七八百擔ニ達スルコ  
トアリト云ヘリ、徳化ハ四方山ニ依テ圍マル、ト雖モ、附近ハ概シテ禿剥トシテ、樹木稀ナ  
リ、然レドモ約半日行程ノ土地ニ至レバ、松樹ニ乏シカラス從テ、燃料ヲ得ルニ敢テ困難ヲ  
感ゼス、松薪ノ長サハ通常約一尺五寸許トシ、其價格ハ一擔即チ百斤ニ付約三十四五錢ナ  
リ。

とあり、徳化窯が松の木を大量に使用して、燃料がなかなか得られなかったことがわかる。

このように燃料の値段は極めて高かったことが知られる。

上述したことから明らかなように、清末には中国の窯業は燃料としてほとんど木材が使われて  
いた。しかし、木材特に松材を得るのが困難となり、陶磁器の値段も当然高騰していたのであ  
る。

### ③窯

清末において景德鎮等の地方の磁器窯は、基本的には清初の窯業とあまり変わられなかった。  
錦窯の例を挙げて説明したい。

光緒 26 年（1900）において藤江永孝の報告<sup>(16)</sup>には景德鎮の窯について詳しく叙述されてい  
る。その中に錦窯について、

錦窯ハ大抵二尺五寸乃至三尺斗ノ者ニシテ、内外窯ノ間隙甚ダ狭ク、外窯ノ下方地ニ接スル  
處ニ於テ周圍ニ拾數個ノ小孔ヲ残シ置キ以テ、空氣ノ流通ニ供ス、燃料ハ何レモ木炭ニシ  
テ、然モ其質堅キ者アリ。

と記されている。また康熙年景德鎮において布教活動した宣教師ダントルコール師の『中国陶磁  
見聞録』<sup>(17)</sup>によれば、

窯は地より半尺程高く設へられ、厚けれども幅廣からざる煉瓦二三列の上に坐り居候、窯の周囲にはよく接着されたる煉瓦の周壁有之、その下部に三四の風孔設けられて、恰も鑪の輔の如き役目を致候。此の周壁と窯との間には約半尺の空地あり、ただ三四箇處に於てのみ、支壁ありて窯と周壁とを連繋致居候。その中央に磁器の焼上がりを驗視する為に一孔を残し置候。次に窯下に炭火を多く燃し、又その蓋の上にでも之を燃して、其處より窯と周壁との間の空地へ炭を投入れ申候。

とあり、錦窯は低く狭くて簡単な構造で築かれていたことがわかる。

なお、清末の窯には大部分薪を用いて焼成した柴窯というものがあった。湖南省醴陵磁器会社の工場では陶土を振るい分け、陶磁器を成形するのをすべて新式機器をしていたことがわかる。しかし、その窯については柴窯かそれとも石炭窯かを知ることができない。1913年頃、江西省磁器会社は張浩と鄒如圭の協力のもとで、石炭窯の試作に成功した<sup>(18)</sup>。しかし、その石炭窯は景德鎮に広く行き渡らなかつた。張浩たちは、もともと規模が小さい石炭窯を築いた。しかし、その窯の煙を排出していた通路が警察署の後ろを通過していたために、また警察署がこの場所を譲渡しようとしなかつた。煙を排出できなかつたので、石炭窯は陶磁器の品質に満足するものではなかつた<sup>(19)</sup>。その後の戦乱のため醴陵磁器工場も景德鎮磁器会社も元の手工業に戻っている。

#### ④製品の流通経路

清末において中国産陶磁器の一部が外国に輸出されたほか、多数の陶磁器が中国国内の需要を満たしていた。

景德鎮産磁器の販路について、北村弥一郎は次のように記述している<sup>(20)</sup>。

景德鎮磁器ノ一小部ハ欧米ニ向テ輸出セラレ、又一部ハ南洋其他ニ散在セル出稼的支那人或ハ暹羅ト安南人等ニ向テ輸出セラルト雖モ其主部ハ国内ノ需用充タサル、モノトス、而シテ支那全國中ハ到ル處トシテ其供給ヲ見ザル處ナシト雖モ就中主要ナル販路ハ広東北京天津及上海方面トス、抑モ景德鎮産貨物ノ殆ンド全部ハ一先ヅ鄱陽湖ニ出ヅルモノトシ、而シテ広東行モノハ同湖ヨリ長江ニ出デ、上海ヨリ海路ニ由ルトキハ半ヶ月内外ニテ達スルコトヲ得ベキモ、多額ノ運賃ヲ要スルヲ以テ通常河水ヲ利用シ贛江ヲ逆リ陸路ニヶ月許ニシテ達スルモノトス、又北京天津方面行貨物ニ在テハ漢口ニ出デ京漢鉄道ニ依ルコトナシトセザルモ、是亦運賃ノ關係上主トシテ水路運河ニ據レリ、其他四川雲貴兩湖安徽浙江等ノ地方ニ至ルモノハ何レモ長江或ハ其支流ニ依テ運搬セラル、モノトシ汽船ノ便アル處ト雖モ大抵民船ニ積載セラレ、之レ民船ハ汽船ニ比シ時間ヲ要スルコト多キモ、其運賃ノ低廉ナルヲ以テナリ。

景德鎮産の磁器輸送の経路は必ず鄱陽湖を通じて長江とつながっている。これは景德鎮磁器の輸出に大きく影響を与えた。例えば、1880-81年に長江の水位が極めて下がったために、多くの汽船は目的地に行けず、やむなく近くで停船していた<sup>(21)</sup>。

徳化磁器の販路が福建省一省と台湾や南洋を主としたものであった。台湾が日本の植民地になると、日本産陶磁器が徳化陶磁器の販路を奪い取った。そのため徳化磁器は主に福建省内の人々の需要を満たすに止まっていたことがわかる<sup>(22)</sup>。

広東省の石湾磁器はそのほとんど広東省内と香港に輸出していた。しかし、一部の装飾品が上海や漢口などの大都市に向けて移出され、また海外にも輸出されていた<sup>(23)</sup>。

上述したように、清末における中国窯業の磁器製造の方法は基本的に手仕事のレベルにとどまり、設備が時代遅れであり、磁器産地の交通がたいへん不便であったことが分かる。そのため陶磁器の品質の多くが粗製品であり、一般大衆の需要に適していたが、高級品を好み人々は外国から輸入された西洋風精製磁器を用いるようになった。中国産磁器は輸用量が大量であったものの、質的には外国製品より劣っていたのである。

### 3. 新式窯業の展開

清末において洋務運動の影響でさまざまな磁器会社が設立された。その会社は伝統的な手仕事の工場と区別するため、新式といわれた。『清朝続文献通考』<sup>(24)</sup>には五つの新式窯業が列挙されている。それを整理すると、以下の表3のごとくなる。

表3 清末における中国新窯業一覧

名 前	場 所	設立時間と主催者	資 本
江西磁業公司	江西省鄱陽県（饒州）、 景德鎮	光緒33年（1907） 两江総督端方等	銀40万元
萍郷県磁業公司	江西省萍郷県	光緒31年（1905）	銀20万元
醴陵磁業公司	湖南省醴陵県江湾鎮	同上、熊希齡	銀10万元、後50万元に増えた。
浙江改良磁業工場	浙江龍泉県	不明	銀5万余元
寶華公司	福建省厦門	光緒30年（1904）	銀12万両

新式窯業と呼ばれた諸会社は江西磁業公司与醴陵磁業公司以外、運営の時間が長くなかったため記録が欠如している。そのため江西磁業公司与醴陵磁業公司を中心として、清末民国初期の新式窯業の展開について述べてみたい。

#### ①江西磁業公司成立の経緯および運営状況

景德鎮は中国において最も重要な陶磁器産地であったが戦争に巻き込まれて、また生産設備もデザインも古く、製品の質と模様が平凡であったため、次第に衰退していた。長江と鄱陽湖口に隣接する九江のイギリス領事館の領事であったアレン（Clement T. R. Allen）は「1889年九江貿易状況の報告書」<sup>(25)</sup>において、

景德鎮の御窯廠からの陶磁器は中国陶磁というものであります。その中にはたくさんの製品が美しくて実用であるので、九江を通過している外国人はめったに当地の磁器店において買い物に行きません。しかし、中国磁器を船積みでイギリスに出荷すれば予想より利ざやを得られると聞いています。現代の日本製陶磁器がもっと優良で美しいことはうたがう余地がないため、中国産の陶磁器に取って代わっています。日本人はすでに中国陶工が行う必要があ

ることにまだ気づいていないことをやってしまいました。即ち外国市場の需用を調べて、自分の陶磁器製品を改良する最良の方法を行っていることであります。

と記し、中国の陶工たちが世界市場の需要を知らなかったので、中国産陶磁器が日本産のものより劣っていた事態になっていたことが明確に指摘されている。

中国の知識人と官僚の間でも、その問題意識は徐々に感じられた。光緒 29 年（1903）江西巡撫の柯逢時の上奏文において、

然中國之銷數日絀，而外洋之浸灌日多，揆厥所由，實緣窯廠資本未充，不能与之相競。臣嘗見肆中陳設珍玩，於尊彝鼎彝之屬，及宋元舊制皆有仿作，佳者幾可亂真。因購洋式大小盤匱，令之照樣製成，實無稍遜，而堅韌或且過之。惜窯戶恐不易售，不肯捨舊謀新<sup>(26)</sup>。

と報告している。柯逢時は光緒 28 年（1902）から光緒 29 年まで江西巡撫を務めていた。

彼は景德鎮産の陶磁器の売上が外国産品に劣っていた実情を見て、中国陶磁器生産工場では資金が不足し、外国産品には競合できないと思っていた。しかし、柯逢時は陶磁器の店において宋代や元代の磁器の贋作には、ほとんど本物と見分けがつかないものがあるのに気付いた。そのため柯逢時は中国陶工もまた外国人の嗜好に合っているものを作れる思い、外国産の皿等を買って、陶工に模造を命じた。その模造品は本物より質が良く、更に頑丈であった。しかし、窯戸たちがその磁器を販売が困難と考え、新しい案を打ち出さなかったことがわかる。

そこで、柯逢時は光緒帝に上奏して、景德鎮磁器会社の創設を求めた。しかし、磁器会社の設立は順調に進まなかった。『商務官報』<sup>(27)</sup>によれば、

景德鎮磁器公司係光緒二十九年五月經前柯撫奏請開辦，初議官商合辦，故擬半撥官款半集商款，嗣因商股不甚踴躍，而柯撫所奏撥之江西官股十萬兩亦並未核發，迨今年四月吳中丞蒞任，查悉前情，知以籌款為第一要義，飭令李道嘉德赴上海召集商股，現李道已由滬回贛，據稱與江海關道瑞澂熟商，知官商合辦未盡合宜，因商人畏領官本，深恐事權不一，日後滋累，故望而卻步，莫如改為商辦，由商自行招股呈請認辦，較易有成，瑞道並力任糾合同志以為發起人，議立有限公司，妥訂章程，悉按商律辦理，吳中丞深聽其言，業已往復電商妥協，瑞道現已函約留東考察瓷器之人，並合實業家同志者數人，商訂章程，一俟議有定章，即擬標立公司字號，召集商股，咨部立案。

とある。最初政府と商人との合弁による磁器会社設立のため、柯逢時は江西巡撫の身分で銀十萬兩を出資しようと考えた。実際はその資金を用意出来なかったことがわかる。資金の調達には磁器会社の設立のうえで最も重要なことであった。後に柯逢時が何度も転任したので、政府に景德鎮磁器会社のことを担当する役人もいなかったために、僅か二年で運営は行き詰まった。吳中丞（吳重熹）が江西巡撫に就任すると景德鎮磁器会社を江西磁業会社に改めた。李嘉徳が金策のために上海に派遣され、彼は江海関道であった瑞澂と相談して官商合弁が適切ではないと考えた。商人たちは官府の勢力を恐れて、磁器会社において権限と責任が不一致なために将来厄介なことに巻き込まれることを恐れ尻込みした。そのため、すべて商人が経営をすることに改めた。商人たちだけで出資を募り、商部に設立の許可を仰いだことが成功を容易にしたのかもしれない。光緒 33 年（1907）、両江総督端方は磁器会社が民営化することを上奏した<sup>(28)</sup>。瑞澂は江西磁器会

社の設立のためにあちこち駆け回り、新しい実業を興すことを主張していた張謇たちを呼び集めた。内閣中書康特璋（康達）は社長に任命された。さらに、瑞澂は日本に留学した窯業の専門家を集めて、実業家たちと会社の定款と名前そして株式等の問題について話し合った。

『清朝統文献通考』<sup>(29)</sup>には、

（光緒）三十三年兩江總督端方奏，據候選道曾鑄等呈稱，江西景德鎮磁器公司原擬官商合辦，至今未有切實辦法，去年李嘉德來滬集股，與上海道瑞澂會商該公司不如改爲商辦，較有把握擔任發起，定名為商辦江西磁業有限公司，議集股本銀二十萬元，每股五元，計四萬股，發起人認一萬五千股，俟批准後再招二萬五千股，查東西洋各國最重商廠，故其政府凡遇公司必力為提倡，且有由國家出補助費者，其稅則亦無抽收本國貨物出口之條，今該道等自行集股設立公司，多用機器仿造外磁，洵足振興實業，挽回利權，將來此項磁品行銷稅則既經稅務處核准，令完值百抽五正稅，沿途概免，重徵俟中英新約第八款施行，再按第九節出廠稅章程辦理，自系為提倡商業起見，應准如所請奏明立案。

とあり、『商務官報』が記していた内容とおおむね同じである。李嘉德と瑞澂とは最初株式資本として銀 20 萬元を集めることを計画した。一株は五元で、全部で 4 万株に及んだ。その中で主催者は 1 万 5 千株を集め、さらに商部の許可を得て商人たちから 2 万 5 千株を募った。向焯の『景德鎮陶業紀事』<sup>(30)</sup>には、

原擬資本四十萬元，招足時祇收二十餘萬元。所擬辦法，分饒廠景廠兩處。饒廠用機器製造，景廠工作則依舊法。（中略）然在饒州從事建設，則購置基地，建造房屋，安設新式窯巢，均須周詳審慎，故稍稽時日。而景廠則一依舊法，組織較易，故先行開工。

と記している。実際には江西磁器株式会社の資本の予定の半分だった。このことから会社設立の当初は資金が不足していたことがわかる。しかし、景德鎮と饒州の両方に工場が設けられた。饒州に新しく工場を設けようとしたが、新工場の設立には時間がかかったため、旧式磁器生産方式を用いた景德鎮の工場がまず先に稼動した。饒州の工場が生産を始めた時に、機器で磁器を製造できるようにその技術者を養成する陶業学校を設けた。

江西磁器会社は光緒 33 年 9 月（1907）、清政府の商部に登録して、翌年ついに磁器を製造しはじめた<sup>(31)</sup>。景德鎮工場の規模について「景鎮磁業公司辦事章程」<sup>(32)</sup>によってその状況がおおむね理解できる。

#### 一 修理原屋

甲 廳堂 原創之意，本以此屋為本埠銷售廠，兩邊裝設櫃台，今暫添裝房舍，作為辦公之用。

乙 坯房 南中北三重，每重九間，車駕泥池均未設備，須一一如法添置，並擬于中加造工人宿舍，以肅工規（景鎮工人多不在廠寄宿，故易滋事），其舖位擬仿外國工廠辦法，分層安設，雖地窄人稠，仍無擁擠紊亂之弊。

丙 畫室 原有畫室十四間，擬改爲坯房，因在平地，便於挖泥池，安置缸桶，即將畫室依山建造，仿吊腳樓式，分作兩層，上下均獲實用。

丁 窯屋 窯屋必設極大柴樓，預為囤積柴乾而使用，現屋內柴樓仍未具備，窯巢有二，



基礎已定，工程仍未及半，擬從速，一律補建完備。

とある。坯房は南・中・北三方に三列があり，一列ごとに九部屋があった。全部で二十七間だった。しかし，陶車や泥池がまだ無く，一つ一つ用意していかなければならなかった。それから坯房の間に工人の寮を築こうとした。もともと画室として十四部屋が坯房に改築され，新しい画室が山を背に吊脚楼の構造を模倣して建造された。新しい画室は二階建てで，実用的であった。窯は二つあったことがわかる。その章程が起草されていた時には，二つの窯はまだ完成していなかった。

それ以降に清代官窯は江西磁器会社の所有になっていった。官窯の規模について明治38年(1907)の石黒秀久の報告<sup>(33)</sup>によれば，

官窯又ハ御窯廠トモ唱フ，年々北京皇宮ヨリノ申越ニ応シテ，隨時上等ノ彩工ヲ傭フニ過ギズシテ，年中傭切リト言フガ如キ工人ハ僅々六七十人ニ過ギズ。(中略)窯ハ二個ヲ有シ，一昨年(明治三十七年)ノ雇用セシ工人ハ二百余人ナリシト，明治三十八年度ハ皇室ヨリオノ申込多額ヲ要シ，総計七百有余人ニ及ベリト。

とあり，清末の官窯の規模は大きくなかったことがわかる。

『景德鎮陶業紀事』<sup>(34)</sup>には，

至其内容組織。其廠址跨珠山之西北，周圍約三里許，與前清御窯廠相連接。基地寬廣，內為工廠，外為發行所。工廠中分坯作，窰作，彩作三課。……窯巢兩座，每四日出瓷一次。一次所值約二千餘元。

とあり，景德鎮の工場が広くて，設備が整っていたことがわかる。その年生産額は約18万元と推測された。

江西磁器会社の饒州工場は民国初頭の戦乱の影響によってすっかり衰え，生産が停止した。そのため残った資金は全部で景德鎮の工場に集中された。陶業学校は磁器会社から分離されて，江西省政府に接收され江西省立饒州陶業学校と改めた<sup>(35)</sup>。しかし，陶業学校と磁器会社の関係はその後密接であった。両者は共に磁器製造技術の改良に向けて尽力した。かつて日本東京高等工業学校に留学した張浩(張犀侯)は陶業学校学長として石炭を用いる窯を試作し，景德鎮に千年以来木材を用いていた窯が変わった<sup>(36)</sup>。

江西磁器会社は，中国窯業について希望をもたらししたが，なんとかやっと運営を維持できる状態であった。辛亥革命及びこれに伴った軍閥の乱戦は磁器の生産と運輸に大きく影響したのである。それは陶磁器の販路が阻まれたことによって磁器会社が倒産の危機に直面させられた。そのため民国4年(1915)において江西磁器会社の主催者の一人だった張謇は江西民政長に手紙を書いた。その手紙の「為江西瓷業有限公司請撥款維持致江西民政長函」<sup>(37)</sup>には，

吾國政策，實業爲重。江西實業，瓷爲大宗。江西瓷業有限公司開辦有年，成績已著。近接該公司經理康特璋，張犀侯來函，據陳歷史現狀，人事屢變，顛越隨之，負罪引咎，呼援至亟。所幸累年成績，憑藉孔固。現時辦法，亦尚穩慎，惟是汲深不宜綆短。善舞端資袖長。非得五六萬元不足以供營業。據稱前承汪省長允許，撥借一万五千兩。固知財政艱難，不免心餘力絀。惟江西御窯既踏，該公司製品等於碩果僅存，似宜格外維持，庶幾收恢復之功，復有進行

之望，仍希於無可挹注之中，為特別轉圜之計，統予撥借，所幸珠非暗投，璧可仍返，江西實業受惠無涯，更有懇者，該公司饒州分廠內設有陶業學校，經費向由各省撥給，光復后，他省皆未照撥，僅江西一省維持至今，盛意至可敬佩，該校為改良瓷業之津梁，將來尚擬擴充，並希始終維持，免其作輟，此則實業教育倘有關係，不能不有望於公者也。

と記され、江西磁業会社の苦境が見えている。江西省磁業会社の社長として康特璋，張犀侯から借金の申し込みがあり，張謇は江西磁業会社に5,6萬元を注入しなければ運営できないと思つて，まもなく江西省民政長に資金を出資することを求めた。汪省長より借金1万5千兩の同意を得られたものの，実際には最後までその金を出資されることはなかった。また陶業学校については従来から諸省は共同して経費を割り当てていたが，辛亥革命の後，僅かに江西省一省の資金で維持していた。江西省の財政ももともと苦かったため，張謇の要求を満たすことはできなかった。そのため，景德鎮の磁器生産は再び旧式の手工業になっていた。

## ②湖南醴陵磁業公司について

1905年において熊希齡は，湖南省において磁業を興す予定であった。彼は両江総督端方に文書を送り，醴陵に磁業を興すことの利点と計画を述べた<sup>(38)</sup>。その文書に，

竊希齡前條擬推廣湖南實業學堂辦法，曾蒙均鑒，許以次第實行。嗣聞張廉訪傳述均意，欲先速辦一，二校以觀厥成，等語。希齡當思前陳各校為湘所無，大皆主創，惟醴陵瓷器一宗，近夫因民之利而利，較易設法改良，集于四月抄束裝前往考察，一切略有把握，請為大公祖詳細陳之。

とある。端方は湖南省にまず実業学校を創設したいと思つた。熊希齡は醴陵における磁業が人民の生活を楽にすることができると考え，醴陵に磁業学校と会社を設立した。

醴陵磁業会社の設備と生産技術は全部新式であった。宣統元年6月15日付の『商務官報』<sup>(39)</sup>によれば，

其工作之法，先將磁土用磨粉機磨成細粉。以鉄網篩之，擇其佳者送入水篩場。水篩之後，以攪拌器攪之。更入於壓窄機，壓去其水分。乃入於練土機器，練成陶土。陶土成後，乃作成方圓三角各等形狀。再送入模型場。場中有用木板或石膏製成之各式模型。陶土至此，乃在各種模型之上製之成形。成形之後，或以日曬，或用火燄，使稍稍乾燥。乾燥之後，施之以葉而入窯燒之，燒後乃加釉葉。

と記している。磁土を磨いて，鉄網でふるって，質が良い磁土を漉し，攪拌器でかき混ぜた。次に圧搾器で水分を取り除去し，練土器に入れて，精製して陶土をとった。さらに四角形，円形，三角形などの形を作って，模型の中で固めた。乾燥すると葉をかけて，窯で焼いた。そして，最後に釉葉をかけた。このようにして機器を用いた陶磁器の作り方が見られたのである。

熊希齡の磁器改良計画が新技術の採用以外，主に窯戸たちが各自で利益をあげることを通じて達成したと考えられた。「為創興醴陵瓷業呈端方文」<sup>(40)</sup>によれば，

均利。學堂既設，宜於各窯戸中挑熟嫻工作者數十人為速成科，又於各窯戸工人中之子弟擇其年在十五歲以內，文理清順者為永久科。學成之後，聽其各回本廠自謀改良。（中略）醴陵現

在所製粗瓷器皿便於貧民購用，不能概行改爲細工。初二年内學生技尚未熟，只能模仿景鎮之式，公司亦須就與本國相宜而便於人民嗜好者參酌製造。迨各學生學成回窯，改燒景式，則公司專製西式各器，抵制外貨之輸入，使各窯戶得以餘利。至五年之内各窯戶如有進步，能仿西式，則公司即精益求精，專求製造輸出各國之品，（中略）此其成效當在五年後矣。如此交換之法，即可卵翼各窯戶，使之逐漸改良，無失其固有之利。

とある。熊希齡は手工業者たちが、旧来のやり方を踏襲したいとする気持ちがはっきりと分かって、窯戸の利益から順を追って改良を進めた。優秀な窯工および15歳以内の子供が選ばれて、彼らは陶業学校に入学した。卒業すると、彼らは各自の工場に帰って、磁器の改良に専念した。最初の2年は、学生は技術が熟練していないので、景德鎮磁器の模様を模倣するしかなかった。その間に磁器会社は専門に西洋式製品をつくり、外国磁器を排斥していた。そのため、伝統的な中国磁器を製作する窯戸たちの利益が守られた。5年以内に窯戸たちの技術が進歩して、西洋の磁器を模倣できるようになると会社は海外に輸出する磁器を製造させた。それによって、窯戸たちにも利益がもたらされた。徐々に磁業が改良されたのである。

醴陵磁業会社の盛況は、次の記録で見られる<sup>(41)</sup>。

民國三年（1914）、官辦之磁業公司又添設第二磁業工廠。直至民國四五年間，細磁業之繁榮，可謂一時之盛。全年細磁品輸出，不下二百萬元。

と記しているように、民国初頭において磁業会社の売上高が200萬元を越え、一時的には盛んになっていたことがわかる。

しかし、戦争で世が乱れた時には、その理想的な計画が達成できないものであった。

民國七年（1918）南北戰事發生，安武軍張宗昌率師入醴，公私窯廠全體停業，内部設備及重要機器多被毀壞，此業因之一度中斷。民國九年，治安恢復，官方所辦之兩大工廠，因虧損過巨，只能將第二廠恢復。縮小規模，停用機器，全用人力<sup>(42)</sup>。

とあるように、1918年に張宗昌が軍隊を率いて醴陵に入ったので、醴陵の窯場はすべて廃業した。その工場設備の重要な機器の大部分が壊され、当地の窯業は中止せざるを得なくなった。治安を回復した後、官府により主催した二つの工場の損失が大きいため、一つの工場だけで生産を再開した。窯業を維持するために規模を縮め機器を停止し、磁器生産が全部手工作業でしていたことがわかる。

上述したように湖南磁業会社は最初すべて機器で生産していたが、景德鎮磁業会社と失敗する運命をともにしたのである。

清末において陶磁器産業を改良するために設立された様々な「新式」磁業会社はその多くは長つづきしなかったが、一時的に世論を喚起していた。例えば、民國8年（1919）8月15日付の『申報』第二張の「江西之實業觀」<sup>(43)</sup>には、

本省所製陶業以景德鎮為天然佳品，風行中外，近年以受洋磁響影，輸出漸以不振。該鎮磁質優美，惟胚工廠人未能研究心得，形式尚舊，不合西人心理，以致相形見絀。聞實業廳擬于陶業學校設一製胚科，專研究陶業製胚之學，已派技術員前往該鎮調查情形，以便著手改良矣。とあり、作者は景德鎮磁器の輸出が減少したのは製坯工人のデザインが西洋人の好みにあわない

ためだったと指摘した。また、『申報』民国8年8月12日付の「中国陶磁業之衰退」<sup>(44)</sup>によれば、若磁器製造之趨向、則近來已漸趨於粗貨、因國人之需求粗多而細少、製造者視需求者之方向而轉移故也、然實則工藝漸退化、馴至僅能製造粗貨而不能製造細貨、則中國磁業之前途尚堪問乎、況東西洋之陶磁器年來之輸入額日漸增加、將來中國之陶磁業或盡為所奪亦未可知。と記し、中国製磁工芸が退化して、陶工たちが僅かに粗製品を作っていただけであったため、日本と西洋の精細磁器が中国産の磁器に取って変わったと見られた。

以上のように中国製磁工芸の衰えに関する議論はまだ多く残されている。しかし、当時の中国窯業の状況はそれほど悪くなかったのではないと考えられる。それは中国磁器の海外輸出量からである。『中華民国各關華洋貿易総冊』<sup>(45)</sup>によれば、光緒34年(1908)から民国8年(1919)までの間に中国が輸出・輸入した陶磁器の数量は表4のようになる。

表4 1908-1919年中国には陶磁器の輸出入額(単位:海関両)

年代	磁器(陶器を含む)輸入額	典拠(頁)	磁器(陶器を含む)輸出額	典拠(頁)
1908年	399,051	40	1,596,086	46
1909年	486,938	40	1,752,648	46
1910年	686,546	38	1,916,919	44
1911年	772,012	41	1,966,830	46
1912年	815,771	24	1,921,742	29
1913年	1,210,833	69	2,132,269	78
1914年	1,013,649	65	(陶器を除く) 1,075,933	75
1915年	779,591	63	同 1,706,289	73
1916年	967,515	67	同 1,787,399	77
1917年	1,318,037	57	同 1,513,413	67
1918年	1,225,299	75	同 1,482,619	85
1919年	1,287,030	87	同 3,780,295	97

この十年間において中国産陶磁器の輸出額が輸入額を上回っていたことがわかる。特に1914年から1919年までの間、磁器だけの輸出入額を比較しても、中国産磁器の輸出額が陶器と磁器を合わせた輸入額に勝っていた。確かに外国産陶磁器の輸入額が漸次増えて、中国産磁器に影響を及ぼしてはいたが、圧倒的な優位に立つことはなかったと考えられる。

#### 4. おわりに

清末民国初期、中国で行われた新式窯業の試みが失敗した原因には次の二点があると言える。

第一に、いわゆる「新式」窯業は資本主義的な現代企業となったのではなく、清朝官僚たちが社会秩序を維持する手段として利用した点にあった。その実情は柯逢時の上奏文<sup>(46)</sup>においても

読み取ることができるであろう。彼は、

近來洋商屢思來此設廠製造，而奸商或狹外人之勢冀免釐稅，歷經臣隨宜拒絕。倘再不圖變計，將並此區區權利不能自保。

と記している。柯逢時が危惧したのは外国人が景德鎮に工場を設立して、特別税である釐金税を納めないことであった。また中国商人が外国の権勢を盾にして釐金税を免除されることも恐れていた。釐金税は中国税収の重要な収入だけでなく、官僚の政治上の功績として重視されていた。そこで、柯逢時たちには景德鎮の磁業の改良が成功したかどうかではなく、彼らが、どれほどの釐金税が納められたかどうかの方が重要であった。つまり、柯逢時が景德鎮磁器会社を設立した意図は、外国人がそこに工場を創設することを阻止し、当地で一貫していた伝統的秩序を維持しようとしたことである。

第二に、中国国内の人々の生活が日ましに困窮し、消費力が衰えたことで、磁器生産が精細磁器から粗製磁器に推移していった。その結果、粗製磁器の価格が安価であったため、その取引量から得られた僅かな利益だけでは少なく、磁器会社の運営コストを充足することは充分にできなかったと考えられる。

上記のように、清末に洋務運動期の影響を受けて、中国の古くからの伝統的な産業であった窯業においても新式方式が採用され運用されたが、重工業などの産業に見られたような大きな進展はなく、民国時期初期においても旧来の伝統的方式がなお強く残存していたのであった。

#### 注

- (1) 西順蔵編『洋務運動と変法運動』、『原典中国近代思想史』第2冊，岩波書店，1977年4月27日第1刷，14-16頁。
- (2) 中国史学会主編『洋務運動』，上海人民出版社1964年4月。夏東元氏の研究成果は阮芳紀氏編の『洋務運動史論文選』に見られる。巫碧秀，「洋務運動研究の現状と課題：日清戦争以前の官営軍事工業の評価を中心に」、『三田学会雑誌』，2000年7月。田育誠，「洋務運動時期における中国近代技術産業の導入と発展の研究」、『神奈川大学国際経営論集』2002年3月～2007年10月。鈴木智夫の「洋務運動期における上海生絲貿易の展開」は1986年における中国近現代経済史シンポジウムによった。
- (3) 劉錦藻『清朝統文献通考』，浙江古籍出版社，2000年1月第2版，1336頁。
- (4) 『清朝統文献通考』卷386，実業9，1337頁。
- (5) 『清朝統文献通考』卷386，実業9，1337頁。
- (6) 藤江永孝「清国景德鎮磁器視察報告」、『農商務省商工局臨時報告』，明治33年（1900），第2冊，114頁。
- (7) 『清朝統文献通考』卷386，実業9，1337頁。
- (8) 『清朝統文献通考』卷386，実業9，1337頁。
- (9) 北村弥一郎，「清国窯業調査報告書」、『明治後期産業発達史資料』，第246巻，龍溪書舎，1995年2月復刻版，55-56頁。
- (10) 『清朝統文献通考』卷386，実業9，1337頁。
- (11) 藤江前掲報告書註(7)，114頁。
- (12) 石黒秀久，「清国景德鎮ニ於ケル製陶業」、『農商務省商工彙報』，明治40年（1907），第3号，216頁。
- (13) 加藤助三郎「清国陶磁器産地視察報告書」、『農商務省商工局臨時報告』，明治33年（1900），第2冊，139頁。

- (14) 同上, 141 頁。
- (15) 北村前掲報告書註(9), 68 頁。
- (16) 藤江前掲報告書註(7), 120 頁。
- (17) ダントルコール著, 小林太市郎訳註『支那陶瓷見聞録』, 第一書房, 1943 年 3 月 20 日第 1 刷, 168 頁。
- (18) 周鑿書『景德鎮史話』, 江西人民出版社, 2004 年 9 月第 1 版, 120 頁。
- (19) 同上, 121 頁。
- (20) 北村前掲報告書註(9), 47 頁。
- (21) *Report on the Trade of Kewkiang during the Year 1880, British Parliamentary Papers, China*. Irish University Press, 1972.
- (22) 北村前掲報告書註(9), 75 頁。
- (23) 同上, 80 頁。
- (24) 『清朝統文献通考』卷 386, 実業 9, 1338 頁。
- (25) *Report on the Trade of Kewkiang during the Year 1889, British Parliamentary Papers, China*. Irish University Press, 1972.
- (26) 「光緒二十九年五月二十四日江西巡撫柯逢時奏開辦景德鎮瓷器公司」, 沈桐生輯『光緒政要』卷 29, 沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』第 35 輯, 文海出版社, 1836 頁。
- (27) 『商務官報』, 光緒 32 年 (1906 年) 9 月 25 日, 21 期, 台北国立故宫博物院, 1982 年 1 月影印。
- (28) 『清朝統文献通考』卷 386, 実業 9, 1338 頁。
- (29) 『清朝統文献通考』卷 386, 実業 9, 1306 頁。
- (30) 向焯『景德鎮陶業紀事』上編, 景德鎮開智印刷局, 1920 年, 52 頁。
- (31) 『商務官報』, 宣統元年 (1909) 5 月 15 日, 「本部具奏江西瓷業公司請給關防摺」。
- (32) 『商務官報』, 光緒 34 年 (1908) 1 月 25 日, 第 1 期。
- (33) 石黒前掲報告書註(12), 220 頁。
- (34) 向焯前掲書註(30), 53 頁。
- (35) 周鑿書前掲書註(18), 155 頁。
- (36) 同上。
- (37) 張怡祖編『張季子 (謇) 九録 實業録』卷 5, 沈雲龍主編『近代中国資料叢刊統編』97 輯, 文海出版社, 1340-1341 頁。
- (38) 熊希齡「為創興醴陵瓷業呈端方文」, 『熊希齡集』上冊, 湖南人民出版社, 1985 年 10 月第 1 版, 77 頁。
- (39) 『商務官報』, 宣統紀元 (1908) 6 月 15 日, 第 18 期。
- (40) 熊希齡前掲文註(38), 80-81 頁。
- (41) 『中國実業誌』, 中國經濟調查報告華中編第三種, 湖南省第一冊, 宗青圖書公司, 1980 年 10 月初版, 231 頁。
- (42) 同上。
- (43) 『申報』, 民国 8 年 (1919) 8 月 15 日, 上海書店, 1983 年影印。
- (44) 『申報』, 民国 8 年 (1919) 8 月 12 日, 同上。
- (45) 『中華民國海關華洋貿易総冊』, 國史館重印, 1982 年 6 月。
- (46) 前掲「光緒二十九年五月二十四日江西巡撫柯逢時奏開辦景德鎮瓷器公司」, 1837 頁。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程)